

# 晩年のフリードリッヒ・リスト（二）

——かれの「将来の科学」について——

赤 羽 豊 治 郎

## 目 次

- 一 晩年のリスト
- 二 初期のリスト
- 三 中期のリスト
- 四 「将来の科学」の地位

## 一 晩年のリスト

ここに晩年のリストとはゲオルク・ワイペルトの書名を借りたものであるが、とくに一八四三年から四六年の数ヶ年を指す。この間のかれの著作活動の成果は一八四三年テオドル・テュゲルの援助を得て公刊された「関税同盟新聞」に掲載され、リスト全集第七巻にその大部分が編集されている。この書の編集方針は四部に分かれ、第一部は「ドイツ人の政治的国民統一」に関し関税同盟ならびに英独同盟文書を、第二部は「ドイツ人の経済的国民統一」と題し、ドイツ国民的工業の育成を巡る自由貿易と保護関税論議とイギリスの産業革命後の社会問題とこの国の世界制

覇の進展に注目する。第三部は書齋学者とソフィストを難ずの題下で四篇の小篇が収められているが、「世界主義と国民体」の一篇が注目されよう。<sup>③</sup> 第四部は以上の結論として「ドイツ人の政治的・経済的統一」が遺書として収められている。またその付録Ⅰとして「イギリス・東印度およびメトロポール・コロニアル・シュッツジステム」の一文を載せている。

これらの論説のうち、いわゆる英独同盟文書と遺書の二代表作品はリストの「政治経済学の国民的体系や自然的体系の基礎をなすかれの経済的および世界政策の未来像を変えた」(ゲルトルート・マイヤー)<sup>④</sup> 文書であって、かれの終始包懷した「国民的理念」<sup>⑤</sup> の大胆な表白である。当時の世界状況では「イギリスはすでに完全にそれ自身一つの世界である。しかもこの世界は勢力と富とにおいて他の世界を遙かに凌駕している世界なのである」<sup>⑥</sup>。「イギリス世界がひとたび棉花を紐育やニューオーリンズで、羊毛・穀物・亜麻種子をドイツで、生糸を伊太利で買付を中止し、植民地との連繫を深め自足し始めるとき、経済的大領域経済と世界政策的勢力ブロックが形成される」(ギンター・シュメルダース)<sup>⑦</sup>。かような組織体をインペリウム(植民的帝国主義)という。「正常国民はイムペリウムに、すなわちかれらの原料基礎を政治的・植民的に或は通商条約によって、しかもこれを永遠に組織する国民となる」(アルツール・ゾムマー)<sup>⑧</sup>。この帝国主義の発見こそ、経済的に「ロバート・ピールの財政および関税改革が植民地保護の差別関税理論に、かれ以前のイギリスのどの改革者よりも多く追従した」<sup>⑨</sup> ことを看破せるものであった。

リストは将来イギリスの世界制覇にいどむ強国としてアメリカ合衆国・フランスとロシアの三大勢力をあげた。そのうち北アメリカの帝国主義勢力の台頭に注目し、土地広大にして人口増殖力高く、北アメリカはまもなくその領域をカリフォルニアや大太平洋に至るまで拡張し、進んで中南米諸国において一種のアメリカ連盟を結成するに至ろう、と

予言する。イギリスも「ナイル河畔・紅海沿岸・ユーフラテス河畔・ペルシャ湾沿岸の国々」を自己の勢力圏におさめ、またマルタとサイプラスを経てスエズに至る地中海上の拠点を手中に入れるであろう。<sup>⑪</sup>この運河はすでにリストがパナマ運河計画と同よう重視せるところであつた。<sup>⑫</sup>このほかフランスは北アフリカで植民勢力を發展せしめ、ロシアはヨーロッパに対してマケドニアのフィリップの役割を、アジアに対してはその息子アレキサンダーの役割を演ずるだろう、とみるのである。<sup>⑬</sup>

かかる勢力に対し、ドイツの進路はイギリスと同盟を結び、アメリカを抑え、イギリスの世界政策遂行の路線を保障し、他面ドイツ自身の国民的・経済的勢力圏をドナウ河から黒海に求め、いわば準帝国の建設を目論むに至る。これはこの計画をすでに「農地制度論」(一八四二年)<sup>⑭</sup>において開始し、まずハンガリーへのドイツ人の入植に始める。この国は「ドイツにとって、トルコ・近東全域および東洋に至る鍵であり、同時にまた北方の強国(ロシア)に対する防塞である」<sup>⑮</sup>からであろう。

事態は正にかくの如くであるが、この同盟はリストの地政学的考察を基礎として、イギリスのためにもアジアおよびアフリカを屈服せしめる唯一の紛れなき手段となる。同盟文書はイギリス世界帝国のアジアの前方基地への大陸交通路を確保し、フランスとロシアに対する世界的覇権の主張を認める。またドイツは自国工業の繁栄と国民統一を関税同盟の運営で前進し完成し得なければならず、適度の保護制度はドイツ工業に有利であつたし、イギリスのドイツ向け輸出は減少せず他国(フランス・ロシア)への輸出も比較にならぬほど激増している。<sup>⑯</sup>さらに文書はイギリス政府に対し、若きドイツ工業を短命な商業的利益のために破滅させざるよう、また民主政治の下にドイツはイギリスの敵と提携せざるを得ない、とのアッピールに終っている。ドイツ人は「未だどこにも実現されていずまた現実されそう

もない。それゆえに経験によって未だ全く証明されていないところの、あの普遍的貿易自由の単なる理念」に警戒的である、とも述べている。<sup>⑬</sup>

リストはこの同盟の成立のため友人の忠告を振り切り、一八四六年六月反穀法運動（自由貿易運動）の高まる大波のなかのロンドンにつき、二十五日上院の外交官席で該運動の勝利を、下院ではアイルランド法案の廃棄とともにピールの失脚の歴史的瞬間を目撃したのであった。この結末がかれ自ら生命を絶つに至った主因となったという。

## 注

① Weipert, G.: Der späte List. Erlangen, 1956.

② テーゲルはゲッティンゲン大学の国家学・経済学私講師の地位を退き、一八四五年以来関税同盟新聞のリストの共同編集者となる。かれの死後孤忠を守り、同紙の続刊に尽力した。

③ この論文は一八四五年同盟新聞第二九号で発表されたものであって、グスタフ・フォン・ヘフケン Hölken (一八一—一八八九) がドイツ月刊紙(ライプチヒ・一八四五年)に「関税同盟立法問題に関するドイツ月刊紙」の題目に就て発表せるものに對し、リストの感想を述べたもの。同氏は中年まで官吏、のち独学で政治経済学を勉強した、「大なる行動力・熱烈な愛国心に富み、精勵格勳の人物」であつた。

ヘフケンの論文がアダム・スミス理論は原子論的なに、工業は国家社会の有機体にぞくすと説く点をリストは新発見と称揚し同様の見解を自分も吐露し各処で「有機的」概念を用いたと述べた。「スミス理論は個人のみを、そして全人类社会を知っているが、国民に就て何のメモもしていない。のにわれわれは団体の本質的要素に農業・工業および商業を数える。またヘフケンは個人の文字の代りに原子の文字を、また本質的要素の代りに有機的要素を用いんとしているが、われわれはそれに反対しない、それによって區別自体から何ら異なるものはないであらう。だが、世界主義的と国民的の間の相異は少くないのである……」。(以上第七卷編集者の解説に於て) List-Werke VII, Kommentar, S. 668.

④ Mayer, G.: Friedrich List als Agrarpolitiker. Stuttgart, 1938, S. 25.

- ⑤ 「国民的理念とは各理念の如く、過去の歴史的事実から國民に課した任務を公準化し、それを将来において実現する理念である。この理念は過去に課しそれを理解する秩序の一つの原則であり、現在を固定し現在を通じて将来へ道を示す。そのため国民的理念は政治的ボスチュラートになるが、政治的プログラムでない。そして民族の存在に意味を与え、他めんその民族が自己の歴史の意義（歴史的使命）を悟り國民たらしめる理念である。國民とは民族がかれに措定された任務を意識し、この任務に政治的意志を指向した民族である。国民的理念はこれまで國民の心のなかに潜在した政治意志を喚起する。これによって一民族がその國民的意志を國民的理念が課した任務の解決を目標とするや、歴史が形成し、未だ認識せずわずかに信仰のなかで把えたエンテレヒー・発展の威大なプランに自己を投入するのである。」 Bissing, W. M. Frhr. v.: *Nationale Idee und politisches Ziel, in Schmollers Jahrbuch*, LXXVI, 4, S. 1.
- ⑥ List-Werke, VII, S. 39. 訳文は小林昇氏のもの。「リストの生産力論」(昭和二十三年)九二頁。
- ⑦ Schmölders, G.: *Geschichte der Volkswirtschaftslehre*, Wiesbaden, S. 49.
- ⑧ Sommer, A.: *Friedrich Lists System der politischen Ökonomie*, Jena, 1927, S. 216.
- ⑨ この特恵關稅制度の確立が、その「帝國主義權力獲得の手段」(全集第七卷序文三二頁)であり、否定し難き冷厳な事実であった。
- ⑩ 歴史家フリードリッヒ・フォン・ラウマー(一七八一—一八七三)は北アメリカの人口増加は幾何級数的果進率を示し、一七八〇年二百万人、一八四〇年には千九百万を数えるといひ、また領土に就ても「合衆國の現在の領土はニューヨーク州の現在人口よりも租密度を増すことなしに二億の人間を養う」と述べている。リストはこれを受け、アメリカは一代ごと人口のみならず、富や勢力も倍加し幾何学的割合の成長を期待しうるに、イギリスは領土狭小なため算術的割合で成長しうるにすぎず、とみる。List-Werke, VII, S. 272, S. 487. 正木一夫氏訳「ドイツ統一論」(昭和三十三年)八七、一二八頁。
- ⑪ Ritschl, H.: *Friedrich Lists Leben und Lehre*, Tübingen u. Stuttgart, 1947, S. 146f.
- ⑫ List-Werke, VII, S. 491. 正木氏訳 九三頁。
- ⑬ List-Werke, VII, S. 274. 正木氏訳 一三三頁。

リストは別に「今日では文化の最高段階にあっていづれの点においてもよく組織された強大な國民体のみが、自己の全晩年のフリードリッヒ・リスト

将来を支配している。これに数えるは特にイギリス・フランスおよびアメリカであつて或前提の下でのみドイツ・ロシアおよびスペインもこれに入る。他の諸国家および国民はすべて同盟や外部の情勢に依存していて、その発展・存続の保証を自己自身のなかに有していない」。VII. S. 483. 正木氏訳 七九頁。

また別にかれがアメリカのリーディング・アドラー紙主筆として一八二八年次の如く論じてもいる。「ロシアとアメリカ合衆国は百年後地上もつとも人口多く富める国となるであろう。それぞれ現在のヨーロッパ諸国を合したほどの住民を有するであろう。かれらの利害に就ても国家制度で対立しているが、それぞれの仕方ではアメリカは巨大な共和国、ロシアは巨大な君主国として巨人となろう。しかもこの相異なる二つの巨大国はもしフランスとイギリスが長く弱国になれば、互に反目衝突するのは間違ひあるまい。かれらはたとえ最重地域では互に敬遠するにせよ、最弱地、たとえばアメリカの北西地域・アジアの北東地域では接触する惧れがあることは非常に重大である」Notz, W.: Friedrich List in Amerika. Weltwirt. Archiv. 1925, I, S. 227 zit bei Rischl, S. 148.

- ⑭ 大河内博士は、ドイツの今後の世界政策は、リストでは(一)イギリスとの妥協の試み、(二)中欧的領域経済圏の形成の企図ならびに、(三)移民政策および(中南米にわたる)貿易政策が考慮さるべく、しかもこの三方向にわたる世界政策はかれの段階的構想と乖離したものと説かれる。(大河内一男氏「スミスとリスト」著作集第三卷 三七二頁)。

- ⑮ Die Ackerverfassung, die Zwergwirtschaft und die Auswanderung. List-Werke. V. 小林氏訳「農地制度・零細経営および国外移住」(世界古典文庫版)昭和三十四年版。

- ⑯ List-Werke V. S. 502. 小林氏前掲書 一九二頁。

- ⑰ List-Werke VII. S. 283. S. 293. 正木氏訳 一四九頁、一六五頁。

- ⑱ List-Werke, VII. S. 283. 正木氏訳 一四九頁。

- ⑲ List-Werke, VII. S. 292 (正木氏訳 一六五頁) Schmölders, ibid. S. 51.

## 二 初期のリスト

周知の如く、ドイツの政治風土は南独北独それぞれ相当の開きがある。リストは保護制度に関し両地域の相異を政治生活の面に就て把らえ次の如く分析する。南部は早くより立憲制度が確立せるため、市民の政治的教養の点でまた国民力の源泉を認識せる点において優位にあるを指摘している。これは少くとも民主制が南部において一步前進せるを物語るものであらう。<sup>①</sup>これは南独がいち早くナポレオンの侵入を受け或は小都市の多くが旧帝国自由都市で市民は神聖ローマ帝国の古きよき時代のドイツ国民と皇帝への追憶に浸っていたが、貴族に対してはかれらの社会的勢力・政治的識見を巡って対峙し精神的・政治的諸力を消耗したという。<sup>②</sup>

かれらの政治活動はゲマインデ（公共的自治体）がその舞台であり、ゲマインデの決定は市民意思の自由な決定とその自由なる実現をみるを得べく、リストの郷里・帝国自由都市ロイトリンゲンの民主主義的自由とも解すべきであらう。リスト自身「青年期の最も早い頃に市民的共同精神の作用をなおまざまざと体験した。この体験はとくにリストの家系の伝統に従ったままであった」（エルナ・シュルツ）<sup>③</sup>し、またヴルテンブルクの書記として親しくゲマインデの経済・行政組織を観察し、下意上達の国家組織の必要を痛感したといわれる。<sup>④</sup>

かれは「ヴルテンブルクの国家統治論考」（二八・一六年）で、人間ははじめ家族のなかに、次にゲマインデのなかで、次にデイストリックのなかで次にプロヴィンツがあり、最後に国家がある。この階層組織は自然の運行で、それは逆い難い根拠がある。「国家は多くのプロヴィンツの結合であり、プロヴィンツは多くのカントンの結合であり、

そしてゲマインデは全体目的を達成するための、個々人の結合である」<sup>⑤</sup>。かく個人は直接国家に結びつかず、家族以外の各種のコルポラチンが介在する。これをコンポラチオン制度或はインヤング制度という。「この制度の一つ一つの階梯はその独自の社会目的に関して自由かつ独立に行動し、ただ一そう高次の共同目的に関してのみ、一そう高次の法律と権力とに従う」。その最高の段階にあるが国家であり、全体の福祉の実現と各団体の規制的行政を司る。君主は政府を統轄する<sup>⑥</sup>。これが青年期リストの国家論の要約であるが、かれはさらに当時の国家学がこのコルポラチオン制度の認識に欠けることあるを難じ、「国家科学でコルポラチオンをかたちの体系でほとんど考えもしない如く注意をそらすというは非常に奇妙なことだ。個人は国家であらゆる他人とじかに結合するとみる。このことは個体の見通し難き大海の如きものであろう。その場合秩序は決して育つまい。われわれは科学において自然に忠実に従わなければならない」<sup>⑦</sup>。この自然に就てのワイベルトの説明は、リストの本質観照の立場では、「事物の性質」に叶うとの意味である<sup>⑧</sup>。

リストの国家理論の特質は政治団体が個人にその自由を保証する問題にいかに対処せるかにある(ワイベルト)。かれの初期著作は人間共同生活の整序の問題に就て、個人の自恣的意思の結果としてのアナルキ―と専制君主の独裁政治の表現としての専制を論じ、前者の独断的個人主義を避けこれを無思慮なフランス的妄想と断じ、後者に就てはかれの人間存在の現実観察に立脚して、「それゆえに最も厳しい専制政治はまた最弱で支持し得べからざる政府である。けだしすべての力は死んでいゝただ一人に集中する」<sup>⑨</sup>からと説き、独裁政治から全体の福祉にふさわしい合法的支配への直接移行を主張し、君主は野蠻を根絶し教養を高めるため国民の精神と力を喚起すべしと論ずる。

そこで、かれのゲマインデの自由の実体がいかなるものかに就ての判断が改めて求められるわけである。もちろん中



世都市のギルト（インヌング）の組合員の権利は無限ならず多くの制約があり、いわばフランツ・バーダー（二七六五—一八四二）のソチエテートにおけるコルポラチフ・フライハイトの如きものが比較されよう。<sup>⑩</sup> リストのコルポラチオンは各社会組織・各社会的秩序の原素的な事実である。「いままでの国家科学には自然はインヌング制度を見極めていないという、一つの大きな欠陥がある。なぜなればこの制度のみによって真の自由と完全な秩序が維持できるからである。……このインヌング制度を奇妙なものと思う人には、全世界は一つの市民的結合のなかに立たねばならぬというブローベに理念に高まるかも知れない。この理念を全く不自然なものとするわけにはいかない。……ただし独立国家の戦争は個人対個人の争いと同よう人間の粗暴な性質の突発だからある。この種の結合を現存せるものと考ええるならば現在の独立国家は世界国家におけるコルポラチオンに外ならず、かれらは現在ゲマインデが国家に対する如く相似の関連のなかの同一状態にある」<sup>⑪</sup>。エルランゲン大学の故ワイペルト教授は多年リスト研究を行い、右引用の一節から次の如く中期リストを地位づけられた。

「ここから始めて、中期リストが政治経済学の自然的体系と政治経済学の国民的体系の扉に掲げた『祖国と人類』の標語を十分に理解できよう。中期リストの局面はまさに個人的自由の問題を国民国家的要因との調和にもたすか否かにある。しかし晩年（後期）のリストは明かに国民国家時代の限界性と同時に歴史性をみている」<sup>⑫</sup>。

## 注

- ① List-Werke VII. S. 295. 正木氏訳 一七〇—一七一頁。
- ② Bissing, *ibid.* S. 402.
- ③ Schulz, E.: Friedrich Lists *Geschichtsauffassung*. Zeitschrift f. d. ges. Staatswiss. 97. 2, S. 292. 訳文は小林氏

- ④ 前掲書 111四〇頁。  
Lenz, F.: Friedrich List und der Liberalismus. Schmollers Jahrb. 48, Jg. 1924, S. 429.
- ⑤ 小林氏 前掲書 1111四頁。
- ⑥ 小林氏 前掲書 1111〇頁。
- ⑦ List-Werke, I. S. 103.
- ⑧ List-Werke, ebenda. und Weippert, ibid. S. 74.
- ⑨ List-Werke, I. S. 210. Weippert, S. 75.
- ⑩ Sauter, J.: Franz von Baaders Schriften zur Gesellschaftsphilosophie. Jena, 1925, S. 330f.
- ⑪ List-Werke, I. S. 302, und Weippert, S. 77.
- ⑫ Weippert, ebenda.